2011 年　短期派遣 EUROPA　派遣報告書

1) 氏名　髙橋美穂

2) 派遣先機関名
ルートヴィヒ・マクシミリアン大学ミュンヘン（ドイツ連邦共和国）

3) 派遣期間
2011 年 8 月 1 日 から 2011 年 8 月 22 日まで

4) 研究テーマ
ドイツ語移動動詞、統語論、意味論
（博士論文研究テーマ：ドイツ語移動動詞の語彙的な意味と構文との関連について）

5) 派遣の概要
報告者は、2011 年 8 月 1 日から 8 月 22 日にかけて、ドイツ連邦共和国、ルートヴィヒ・マクシミリアン大学ミュンヘン（略称：ミュンヘン大学）に派遣された。派遣の目的は、ミュンヘン大学主催の言語学サマーアカデミー（Deutsch-Japanische Sommerakademie Linguistik）ならびにワークショップ（Japanisch-deutscher Workshop Linguistik）への参加、および、期間中に開催された研究発表会において、博士論文に向けて現在調査を進めているテーマについての研究発表を行うことであった。

まず、8 月 1 日から 8 月 14 日にかけて、サマーアカデミーが開催された。サマーアカデミーでは、日独の教授陣によって、3 つのテーマ（統語論、言語類型論、モダリティ）にそれぞれ主眼が置かれた基調講演が行われた。基調講演は参加者からの質問が随時受け付けられる形式で、特に日本から参加した大学院生の理解がより深まるよう配慮されたものであった。サマーアカデミー期間中の 8 月 10 日には、講演と併せて、参加者らによる研究発表会が行われた。研究発表会では、ドイツ・日本の博士課程在学者、ポスドク研究者らによる研究発表が行われた。この発表会で、報告者も博士論文に向けて調査を進めているテーマを取り上げ、研究発表を行った。それぞれの研究発表の後には、ディスカッションの時間が設けられ、発表に関して活発で建設的な議論が交わされた。

次に、8 月 16 日から 8 月 18 日にかけて、サマーアカデミーに続きワークショップが開催された。ワークショップでは、サマーアカデミーで基調講演を行った日独の教授陣による発表のほか、ミュンヘン大学からは博士課程在学者・ポスドク研究者の発表、日本側からも若手研究者らによる研究発表が行われた。ワークショップのテーマはドイツ語と日本語の対照研究であったが、ミュンヘン大学側の発表者には留学生も多く、特定の言語現象について、ドイツ語と日本語以外のアジア言語（中国語やタイ語）を比較・対照した研究発表もあった。それぞれの研究発表の後には、参加者らによって活発な議論が行われた。

6) 成果と今後の課題

上述の通り、サマーアカデミー期間中に開催された研究発表会で、現在調査を進めているテーマを取り上げた研究発表を行った。発表後のディスカッションの際に、博士論文の執筆に向け、今後の研究を進める上で重要となる参考文献の指示や、学術的なコメントを得ることができた。研究発表は、“Deutsche Bewegungsverben und resultative Konstruktion, anhand der Beispiele fahren, rudern, segeln“（ドイツ語移動動詞と結果構文—fahren, rudern, segeln を例に）と題して、博士論文のテーマであるドイツ語の移動動詞が、「結果構文」で用いられる場合について、インフォーマント調査の結果と考察を示した。

結果構文はとりわけ英語研究で盛んに議論されてきたテーマであり、近年では英語に限らずドイツ語や日本語、また言語類型論の立場からも調査・研究が進められている。今回の研究発表では、動詞と構文の関係を捉える際に、動詞の語彙的な意味に重点を置く「語彙意味論」の立場から結果構文を分析した影山(1996)、Wunderlich (1997)を理論的な土台とした。インフォーマント調査の結果から、ドイツ語の移動動詞が結果構文で用いられる場合、動詞が表す動作（fahren 車を運転する、rudern ボートを漕ぐ、segeln ヨットを操縦する）の「身体性」の程度が、構文の容認度に影響を及ぼすことが示された。この考察に対して、参加者から、文脈次第で当該の構文の容認度が変わるのではないかという指摘があった。実際に質問調査を行ったドイツ語母語話者からも、結果構文の可否は文脈に左右されるというコメントがあった。この指摘を受け今後の課題として第一に挙げられるのは、文脈による構文の容認度の変化と、動詞の語彙的な意味に基づく構文の制限とをどのように切り分けて分析するか、調査の方法を確立することである。また、今回の発表で先行研究として取り上げた文献がやや古く不十分であることが、参加者から指摘された。その際に必要文献として、移動動詞を取り上げた Abraham (2011)、結果構文を類型論的な観点から分析した小野 (2009)、空間や移動関係などの認知形態がどのような表現形式で現れるか類型化を試みた Talmy (2000)が指示された。これらの先行研究をドイツ語移動動詞の結果構文における用法の調査・考察に組み込むことが、第二の課題である。

今後は、研究発表会で発表した内容に基づいて、博士論文の基礎となる研究論文を完成させる予定である。今回の研究発表で理論的な枠組みとした「語彙意味論」の先行研究の多くは、英語の例を対象としたものである。博士論文では、ドイツ語移動動詞の例を通して、それらの先行研究における仮説を再検討したいと考えている。

今回の派遣を通じて、国際的な場で研究発表を行うという機会に恵まれ、また、参加者同士の議論やコメントから、博士論文の執筆に向けて非常に重要な情報や学問的な視点を得ることができた。最後に、このような機会を与えてくださった本派遣プログラムおよびプログラムを支えてくださっている皆様に深く感謝申し上げる。

参考文献

小野尚之 編 (2009)『結果構文のタイポロジー』ひつじ書房.

影山太郎 (1996)『動詞意味論』くろしお出版.

Abraham, Werner (2011) “Verbs of motion: Impersonal passivization between unaccusativity and unergativity”, in: Malchukov, Andrej and Anna Siewierska (eds.), *Impersonal Constructions*: *A cross-linguistic perspective* (*Studies in Language Companion Series* 124). Amsterdam. Benjamins: 91-126.

Talmy, Leonard (2000) *Toward a Cognitive Semantics. Volume 2. Typology and Process in Concept Structuring*. Cambridge, MA. The MIT Press.

Wunderlich, Dieter (1997) “Argument Extension by Lexical Adjunction”, in: *Journal of Semantics* 14. Oxford University Press: 95-142.